

セルフ・モニタリングと自己理解が否定的意識に及ぼす影響 — 対人関係における違和感を抱いた状況に着目して —

丸山 華子・田中 奈緒子

問題

セルフ・モニタリングについて

Snyder (1974) は、セルフ・モニタリングとは、対人場面において他者の行動を観察し、自己表出行動や自己呈示行動（意図的な印象操作）が社会的に適切かどうかを考慮して自己の行動を統制する傾向のことであると、セルフ・モニタリング尺度を構成した。このセルフ・モニタリング尺度は、(a) 自己呈示の社会的適切さへの関心、(b) 適切な自己表現の手掛りとしての社会的比較情報への注意、(c) 自己呈示と表出行動を統制し修正する能力、(d) 特定の状況におけるこの能力の利用、そして (e) 表出行動と自己呈示が種々の社会場面において一貫しているか変わりやすいのかの程度という5つの状況を含みつつも、単一成成分となっている。

その後、Briggs, Cheek & Buss (1980) は、セルフ・モニタリング尺度を因子分析した結果、演技性・外向性・他者志向性の3因子を抽出し、セルフ・モニタリングの構成と尺度で使用されるものには違いがあるとしている。また、Gabrenya & Arkin (1980) も、尺度を構成する内容に注目して因子分析を行い、演技性・社交性—社会的不安・他者志向性・スピーキング能力の4因子を抽出し、この尺度は多次元的であると報告している。

これらの研究をふまえて岩淵・田中・中里 (1982) は、セルフ・モニタリング尺度の構造を解明するため、因子分析を行った。その結果、外向性・他者志向性・演技性の3因子が抽出され、それぞれ独自性は認められるが、各因子が相互に関連しているため、必ずしもそれぞれの因子が下位尺度を構成しているとは断言できず、セルフ・モニタリング尺度は多次元的な構造であると結論できるとした。

Lennox & Wolfe (1984) もセルフ・モニタリングの5つの論理的構造と尺度で測定されている内

容に相違があるとして、「自己呈示を修正する能力」と「他者の表出行動」の2因子からなる改訂セルフ・モニタリング尺度を作成した。そして、石原・水野 (1992) は改訂セルフ・モニタリング尺度の日本語版作成を目的とし、その尺度の内的構造の分析や他の人格特性検査との比較を通してその関連的妥当性を検討した。その結果、Lennox & Wolfe (1984) と同様に「他者表出行動への感受性」と「自己呈示の修正能力」の2因子が抽出された。

セルフ・モニタリング傾向の高さによる否定的影響

前述したようにセルフ・モニタリングとは、対人場面において、社会的に適切かどうかを考慮して自己の行動を統制する傾向のことであり (Snyder, 1974)、適応的な能力とされている (Snyder & Nancy, 1980)。しかし、以下のような否定的な影響も報告されている。

須賀・庄司 (2007) は、飲食店従業員を対象に感情労働的行動とセルフ・モニタリングとの関連について検討した結果、変容能力の高い従業員はその場にふさわしい行動をとろうとするあまりに感情の不協和が高くなること、成田・松井 (2009) は、セルフ・モニタリングの高い自己呈示者は、周囲の状況や相手の様子を常に観察し、その場で自己呈示を変化させることができるため、現実自己像や当為自己像と矛盾した自己呈示をしやすく、否定的意識を経験しやすい可能性があるとして述べている。また、八城 (2010) は、大学生のセルフ・モニタリング傾向と友人関係について検討し、周囲の期待や状況に応じて適切な方向に自己を変容させていこうとする傾向の強い「高モニター」は、周囲の期待や状況に影響されず、常に自分らしくあろうとする傾向の強い「低モニター」と比べ、相手の性格、内面的類似性、サポート資源という理由で友人を選択し、関係思考的で気遣いのある付き合い方をし、他方、セルフ・モニタリングが低い人は高い人に比べ、友人

の付き合い方において関係回避的で関係不安が高いことを指摘した。

山田・齊藤(2011)は、自己の内面に対して注意を向ける「私的自己意識」や自己の外見に対して注意を向ける「公的自己意識」が高い人ほどセルフ・モニタリングが高くなるとして、セルフ・モニタリングに影響を与える要因として自己意識をあげている。そこで、「自己の内面のあり様や感情に目を向け」るだけでなく、「自らについて捉え、自己を知ること」と定義される自己理解(青木, 2009b)を取り上げる。自己理解とは、「自己肯定を基盤として、自己を多角的に理解し自己イメージを構築する能力」(河崎, 2000)、「他者との関係で、今、自分の内面に生起している感情をありのままに意識し、さらに、自分の性格傾向や考え方について知り、自分に対する理解を深めること」(杉浦, 2002)などと説明され、また佐治(1996)は、カウンセリング学習過程で求められる自己理解について、「自分自身の体験過程を自分自身にとっての拠りどころとする感覚を養うこと」としている。特に杉浦(2002)と佐治(1996)は、自己理解において自己の内面に流れている感情や感覚に気づいて受け止めることを重視している。そして、青木(2009a)は、自己理解を深めることは、自分を正しく理解することに他ならず、ひいてはこの行為は、自己実現、自己概念、自己意識を始めとする様々な概念を人がより明確に獲得していく過程を促進する働きを持ち合わせると指摘している。実際に、自己理解を深めることを目的に実施したプログラムが、学生に自己の意識的内省世界を充実させ、自己洞察を促し、青年期の発達課題である自分らしさの確立を模索するのに効果的であったとしている。

このように、周囲の期待や状況に応じて適切な方向に自己を変容させていこうとする傾向のある人は、自己を変容させる動機や意識、状況によっては適応的な変容を行うことができず否定的な意識を抱いている可能性がある。しかし、自己理解が深まっていれば否定的意識を軽減するであろう。そこで、本研究では、セルフ・モニタリングと自己理解が否定的意識に及ぼす影響について検討することを目的とする。その際、セルフ・モニタリングを行う中での「違和感を抱いた状況」を想起させることで、否定的意識と関連するセル

フ・モニタリングを検討する。

仮説

仮説としては以下の2つを考える。

仮説1：セルフ・モニタリング傾向が高い人は、対人場面において自己に対する否定的意識を抱きやすいだろう。

仮説2：セルフ・モニタリング傾向が高くても、自己を理解しているならば、対人場面において自己に対する否定的意識が低減されるだろう。

方法

調査協力者および調査時期

関東・関西の大学生・大学院生を調査の対象とし、2017年3月～8月に個別に配布・回収を行った。有効回答者は206名(平均年齢21.7歳、年齢範囲18歳～27歳、 $SD = 1.84$)であった。なお、違和感を抱いた状況時の自由記述がなく、否定的意識に回答者した者も違和感を抱いた状況を想起した者のとし、有効回答者とした。

調査手続きおよび倫理的配慮

個別記入方式の質問紙調査で実施した。郵送にて質問紙を配布し回収の形式、或いは講義時間などに集団実施し即時回収の形式で実施した。なお、質問紙の表紙に、研究の主旨および調査への参加が任意であり、データは個人が特定されない形で処理する旨などの倫理的配慮について明記した。質問紙の回答をもって調査協力の同意を得たものとみなした。

質問紙の構成

①フェイスシート：性別、年齢、所属、専攻、学年。②「対人関係における違和感を抱いた状況」についての自由記述：否定的意識を伴う自己呈示の経験(成田・松井, 2009)を参考に、対人関係における違和感を抱いた状況についての自由記述の教示文を作成した。③否定的意識の測定：「違和感を抱いた状況」においてどのような否定的意識を抱くのか捉えるために、成田・松井(2009)の「自己呈示に伴う否定的意識尺度」全21項目を使用した。「自己嫌悪」(6項目)、「演じた自分に対する違和感」(7項目)、「辛さ・苦しさ」(8項目)の3下位尺度から構成されている。④セルフ・モニタリングの測定：対人場面においてどのようなセルフ・モニタリングを行うのかを捉えるため

に、Lennox & Wolfe (1984) の改訂セルフ・モニタリング尺度13項目を使用した。日本語の本尺度は、小口 (1995) が一部改訳したものをを使用した。「自己呈示変容能力」(7項目)、「他者表出行動への敏感さ」(6項目)の2下位尺度から構成されている。⑤自己理解の測定：自己理解を測定する為、自己理解尺度(青木, 2009b)と自己内省尺度(辻, 2004)を用いた。青木(2009b)の尺度は、「現状の自己理解度」(15項目)、「自分らしさへの欲求」(7項目)、「自己理解欲求」(8項目)、「自己の情緒把握度」(6項目)の4下位尺度全36項目から構成されている。そのうち、「自分らしさへの欲求」と自己理解欲求については、実際に自己理解をするための行動を行っていないため除いた。辻(2004)の尺度は、「公的自己意識」(7項目)、「私的自己意識」(5項目)、「自己内省」(4項目)の3下位尺度16項目から構成されている。そのうち、自己内省をどの程度行っているのか測定したいため、自己の内面や外面あるいはアイデンティティなどを能動的に観察し、考え、分析して理解を深めようとする「自己内省」(4項目)のみを使用した。回答は全て、「1. あてはまらない」「2. どちらかといえばあてはまらない」「3. どちらともいえない」「4. どちらかといえばあてはまる」「5. あてはまる」の5件法で求め、

それぞれ1点から5点に得点化したうえで、平均値を算出した。

結果

尺度の作成

セルフ・モニタリング：13項目の質問項目を用いて因子分析(最尤法、Promax回転)を行った。その際、固有値の減衰状況(4.04、1.72、.92・・・)と因子の解釈可能性により、2因子と指定した。十分な因子負荷量を示さなかった1項目を分析から除外し、再度因子分析(最尤法、Promax回転)を行った。最終的な因子パターンと因子間相関をTable 1に示した。小口(1995)と同様に、「自己呈示変容能力」($\alpha = .76$)と「他者表出行動への敏感さ」($\alpha = .75$)の2因子構造を確認でき、信頼性も許容範囲内であった。

否定的意識尺度：21項目の質問項目を用いて因子分析(最尤法、Promax回転)を行った。その際、固有値の減衰状況(7.05、2.07、1.48・・・)と因子の解釈可能性により、3因子を指定した。十分な因子負荷量を示さなかった5項目を分析から除外し、因子分析(最尤法、Promax回転)を行い、さら十分な因子負荷量を示さなかった1項目を除外し、再度因子分析を行った。最終的な因子

Table 1 セルフ・モニタリングの因子分析結果(プロマックス回転後)

No.	質問項目	I	II
第1因子 自己呈示変容能力 ($\alpha = .76$)			
3	相手や場面に応じて行動を変えるのが苦手である	.76	-.11
13	愛想よくする方が得だと思っても、なかなかそれができない	.61	-.21
1	人が集まっているところでは、周囲の期待に応じて行動を変えることができる	.61	.00
5	これまでの経験からして、どんな場面におかれても、必要に応じて行動を変えることができる	.60	.16
9	何が期待されているかがわかれば、それに合った行動をとるのはたやすい	.53	.09
11	自分のやり方が人に良い印象を与えていないと気づいたら、すぐに変えることができる	.44	.14
第2因子 他者表出行動への敏感さ ($\alpha = .75$)			
8	人の感情や真意をつかむことにかけては直観力がすぐれている	.01	.75
6	人の目を見れば、その人の感情を読み取ることができる	-.03	.68
10	人と話をしているとき、相手のごくわずかな変化にも敏感である	-.07	.61
2	人にうそを言われても、たいていその人の言い方や仕草からみやぶることができる	-.08	.58
4	自分が何か適当でないことを言ったときは、相手の目でわかる	.02	.40
7	人に与える印象を思い通りにコントロールできる	.31	.37
因子間相関			.51

パターンと因子間相関を Table 2 に示した。「自己嫌悪」($\alpha = .83$)、「辛さ・苦しさ」($\alpha = .79$)、「自分に対する違和感」($\alpha = .68$) の 3 因子構造が確認でき、信頼性も許容範囲内であった。

自己理解：25 項目の質問項目を用いて因子分析(最尤法、Promax 回転)を行った。固有値の減衰状況(7.07、2.60、2.08・・・)と因子の解釈可能性により、3 因子を指定した。十分な因子負荷量を示さなかった 1 項目を分析から除外し、再度、因子分析(最尤法、Promax 回転)を行った。最終的な因子パターンと因子間相関を Table 3 に示した。「肯定的自己理解」($\alpha = .90$)、「自己分析」($\alpha = .83$)、「自己の情緒把握」($\alpha = .71$) の 3 因子構造を確認でき、信頼性も十分であった。

セルフ・モニタリングが否定的意識に与える影響

否定的意識の「自己嫌悪」「辛さ・苦しさ」「自分に対する違和感」を目的変数、セルフ・モニタリングの「自己呈示変容能力」と「他者表出行動への敏感さ」を説明変数とする重回帰分析を行っ

た (Table 4)。その結果、目的変数を「自己嫌悪」、説明変数を「セルフ・モニタリング」とする重回帰分析を行ったところ、決定係数は 2% であり有意ではなかった ($F(2,203) = 2.15, n.s.$)。標準偏回帰係数をみてみると、「自己呈示変容能力」と「自己嫌悪」では有意な負の係数がみられた ($\beta = -.15, t = -2.03, p < .05$) が、「他者表出行動への敏感さ」と「自己嫌悪」($\beta = -.02, t = -.30, n.s.$) では有意な係数はみられなかった。

次に、目的変数を「辛さ・苦しさ」、説明変数を「セルフ・モニタリング」とする重回帰分析を行ったところ、決定係数は 1% であり有意ではなかった ($F(2,203) = 0.76, n.s.$)。標準偏回帰係数をみてみても、「自己呈示変容能力」($\beta = -.07, t = -.88, n.s.$)、「他者表出行動への敏感さ」($\beta = -.04, t = -.51, n.s.$) ともに有意な係数はみられなかった。

最後に、目的変数を「自分に対する違和感」、説明変数を「セルフ・モニタリング」とする重回帰分析を行ったところ、決定係数は 0% であり有

Table 2 否定的意識の因子分析結果(プロマックス回転後)

No.	質問項目	I	II	III	
第 1 因子 自己嫌悪 ($\alpha = .83$)					
8	自分のことを恥ずかしく思った	.82	-.27	.12	
5	情けない気持ちになった	.77	.13	-.12	
18	自分が情けない人間に感じられた	.73	.10	.07	
6	自分は器が小さい人間だと思った	.62	-.03	-.14	
1	自分の行動を後悔してしまった	.50	.03	.13	
7	相手によって振る舞い方を変える自分を受け入れられなかった	.43	-.03	.32	
16	不安な気持ちだった	.43	.22	-.03	
第 2 因子 辛さ・苦しさ ($\alpha = .79$)					
19	いらだちを感じた	-.15	.79	-.02	
10	気疲れした	-.25	.68	.20	
2	もやもやした気持ちだった	.11	.61	-.15	
11	辛かった	.17	.59	.09	
13	悔しかった	.21	.54	.00	
4	葛藤を感じた	.23	.38	-.08	
第 3 因子 自分に対する違和感 ($\alpha = .68$)					
9	こんなことをする自分は、本当の自分ではないと思った	-.07	-.06	.83	
15	自分の行動に違和感を感じた	.09	.14	.60	
		因子間相関	I	II	III
		I	—	.51	.43
		II		—	.28
		III			—

Table 3 自己理解の因子分析結果（プロマックス回転後）

No.	質問項目	I	II	III	
第1因子 肯定的自己理解 ($\alpha = .90$)					
31	自分自身に自信を持っている	.90	-.05	-.15	
27	自分がやっていることに対して自信がある	.82	-.08	-.02	
18	自分のどこに価値があるかを人に説明できる	.76	.12	-.14	
15	現実社会の中で自分の可能性を十分に実現できると思う	.69	.02	-.05	
29	自分の思った通りに行動ができる	.67	-.01	-.04	
28	今、自分のことが好きである	.65	-.10	.06	
16	自分らしく振る舞うことができる	.62	-.07	.03	
21	自分の長所をすぐ言える	.60	-.01	.10	
14	自分のすべきことがはっきりしている	.55	.07	.05	
17	自分の行動の動機がわかり、それを人に説明できる	.50	.20	.01	
33	自分の進むべき道を十分に認識している	.49	-.04	.18	
19	自分の特徴を言葉で人に伝えることができる	.47	.09	.16	
第2因子 自己分析 ($\alpha = .83$)					
37	自分の行動を客観的に観察するようにしている	-.06	.83	-.02	
36	自分の動機や気持ちをいつも分析している	.01	.82	.01	
38	自分は何者なのかと考えたり、分析したりしている	.05	.69	-.14	
35	自分自身を注意深く観察する方である	.03	.66	.13	
第3因子 自己の情緒把握 ($\alpha = .71$)					
23	自分が楽しんでいるかどうか分かる	-.03	-.16	.63	
25	物事や人物に対して自分の好き嫌いがあることに気がついている	-.08	-.02	.56	
24	自分についてよく理解している	.21	.06	.51	
20	自分が疲れているかどうか分かる	.01	.02	.49	
22	自分については自分が一番よく知っている	.19	.01	.44	
30	自分が怒っているかどうか分かる	.12	-.12	.39	
32	自分の短所をすぐ言える	-.18	.17	.38	
34	自分に欠けている部分をきちんと把握している	.00	.25	.35	
		因子間相関	I	II	III
		I	—	.28	.46
		II	—	.24	
		III		—	

Table 4 セルフ・モニタリングと否定的意識の重回帰分析の結果

	自己嫌悪		辛さ・苦しさ		自分に対する違和感	
	<i>r</i>	β	<i>r</i>	β	<i>r</i>	β
自己呈示変容能力	-.14*	-.15*	-.08	-.07	-.04	-.02
他者表出行動への敏感さ	-.03	.02	-.06	-.04	-.06	-.05
R^2	.02		.01		.00	
Adj R^2	.01		.00		-.01	

* $p < .05$

意ではなかった ($F(2,205) = 0.38, n.s.$)。標準偏回帰係数をみても、「自己呈示変容能力」($\beta = -.02, t = -.22, n.s.$)、「他者表出行動への敏感さ」($\beta = -.05, t = -.71, n.s.$)ともに有意な係数はみられなかった。したがって、「自己呈示変容能力」が高いほど、「自己嫌悪」は低くなることが示され、仮説1は支持されなかった。

自己理解による調整変数の検討

否定的意識の「自己嫌悪」に対する、セルフ・モニタリングの「自己呈示変容能力」、「他者表出行動への敏感さ」と自己理解の「自己の情緒把握」の交互作用を重回帰分析によって検討した。具体的には、「自己嫌悪」を目的変数とし、説明変数にはステップ1に「自己呈示変容能力」、「他者表出行動への敏感さ」、「自己の情緒把握」、ステップ2に「自己呈示変容能力」と「自己の情緒把握」の積、「他者表出行動への敏感さ」と「自己の情緒把握」の積を投入し、階層的重回帰分析を行った (Table 5)。

なお、説明変数はすべて中心化を行った。

その結果、ステップ1の決定係数は2%であり有意ではなかった ($F(3,202) = 1.47, n.s.$)。各説明変数の標準偏回帰係数をみても、自己呈示

変容能力 ($\beta = -.15, t = -2.00, p < .05$) が有意であった。

ステップ2の決定係数は5%であり有意傾向であった ($F(5,200) = 2.26, p < .10$)。標準偏回帰係数をみても、「自己呈示変容能力」($\beta = -.14, t = -1.85, p < .10$)、「他者表出行動への敏感さと自己の情緒把握」($\beta = -.19, t = -2.60, p < .05$)に有意な係数がみられたが、「自己呈示変容能力」と「自己の情緒把握」($\beta = -.03, t = .07, n.s.$)では有意な係数はみられなかった。

また、ステップ2における決定係数の増分に有意差がみられたことから、($\Delta R^2 = .03, p = .04$)「自己嫌悪」に対する、「他者表出行動への敏感さ」と「自己の情緒把握」の交互作用はあり、「他者表出行動への敏感さ」が「自己嫌悪」に与える影響に、「自己の情緒把握」の高低が関連していることが示唆された (Figure 1)。

しかし、「自己嫌悪」に対する「自己呈示変容能力」と「自己の情緒把握」の交互作用はなく、「自己呈示変容能力」が「自己嫌悪」に与える影響は、「自己の情緒把握」の高低に関係なく一定であることが示唆され (Figure 2)、仮説2は一部支持された。

Table 5 自己嫌悪に対するセルフ・モニタリングと自己の情緒把握の重回帰分析

	偏回帰係数	標準誤差	95%の信頼区間	
			下限	上限
<u>ステップ1</u>				
自己呈示変容能力	-.18*	.09	-.37	-.00
他者表出行動への敏感さ	.03	.10	-.17	.23
自己の情緒把握度	-.04	.12	-.27	.19
$R^2 = .02$				
Adj $R^2 = .01$				
<u>ステップ2</u>				
自己呈示変容能力	-.17†	.09	-.35	.01
他者表出行動への敏感さ	.08	.10	-.12	.28
自己の情緒把握度	-.08	.12	-.32	.15
自己呈示変容能力×自己の情緒把握	.06	.16	-.25	.36
他者表出行動への敏感さ×自己の情緒把握	-.43*	.17	-.76	-.10
$R^2 = .05$				
Adj $R^2 = .03$				
$\Delta R^2 = .03$				

* $p < .05$, † $p < .10$

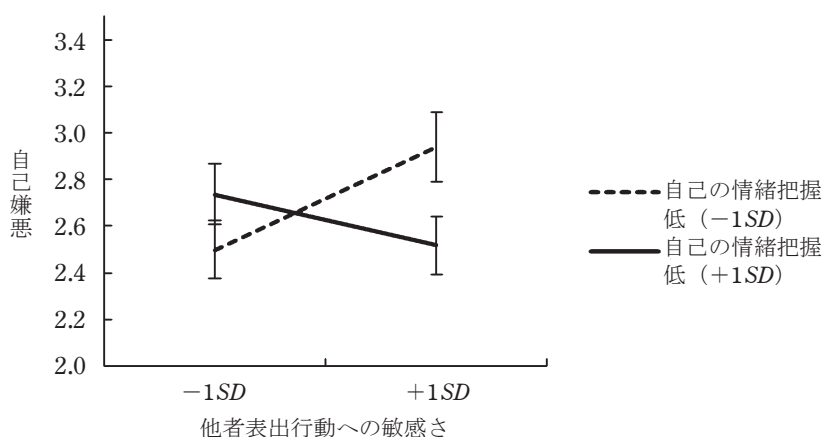


Figure 1 自己の情緒把握による他者表出行動への敏感さと自己嫌悪の関係

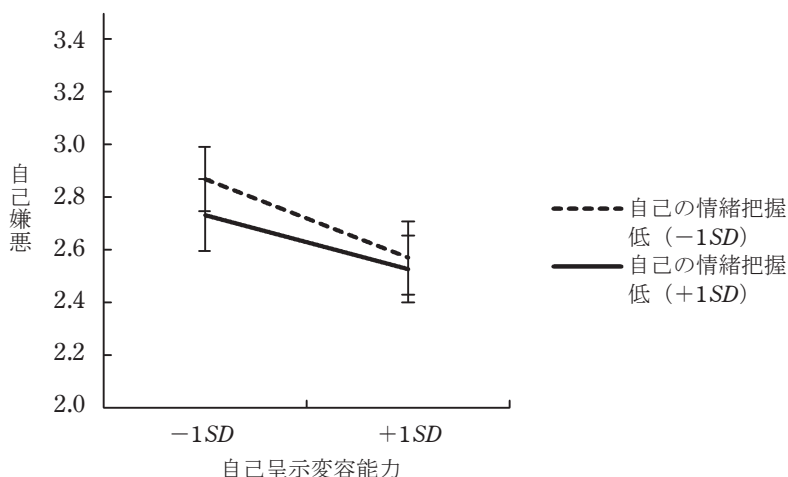


Figure 2 自己の情緒把握による自己呈示変容能力と自己嫌悪の関係

考察と今後の課題

本研究では、セルフ・モニタリングと自己理解が否定的意識に及ぼす影響について検討した。

その結果、セルフ・モニタリングのうち自己呈示変容能力が高いと認知している者ほど、自己に対する否定的意識のうち自己嫌悪を低く捉えていた。これは、対人関係において自己を適切に変容させることができる能力があると認知しているということは、肯定的に自己を捉えていることであり、自己分析や自己の情緒把握にかかわらず自己嫌悪が低いのであろう。また、他者表出行動への敏感さが自己嫌悪と関連がみられなかったことは、他者や状況を敏感に察知することができるという自己の特性への評価は、肯定・否定の両側面を含むため、否定的意識とは無関係であったと考

えられる。

また、他者表出行動に敏感であり、かつ自己の情緒把握が高いほど自己嫌悪は低くなるが、他者表出行動に敏感であり、かつ自己の情緒把握が低いほど自己嫌悪は高くなることが示された。つまり、他者や状況を敏感に察知することができるという自己の特性への評価をしている者のうち、自己の情緒把握ができていれば自己嫌悪は低減されると言える。これは、他者や状況を敏感に察知することができるという自己の特性への評価に加え、否定的な側面も含め自己を理解し受容することや自己の感情を把握し統制できることが、否定的意識を低減する要因につながったと考えられる。

本研究では、セルフ・モニタリング傾向の高さによる否定的影響を前提として検討したが、結果

としては、セルフ・モニタリング傾向の高さは否定的意識の低さと関連していたことから、自己を変化させることに関して、切り替え、自己変容、過剰適応などセルフ・モニタリング以外の概念も用いて検討していくことも求められるだろう。

引用文献

- 青木万里 (2009a). 自己理解に関する文献研究
埼玉純真短期大学研究論文集, (2), 1-15.
- 青木万里 (2009b). 自己理解尺度の作成とその有効性の検討 学生相談研究, 30, 35-46.
- Briggs, S. R., Cheek, J. M., & Buss, A. H. (1980). An analysis of the Self-Monitoring scale. *Journal of Personality and Social Psychology*, 38, 679-686.
- Gabrenya, W. K., & Arkin, R.M. (1980). Self-Monitoring scale: Factor structure and correlates. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 6, 13-22.
- 岩淵千明・田中国夫・中里浩明 (1982). セルフ・モニタリング尺度に関する研究 心理学研究, 53 (1), 54-57.
- 石原俊一・水野邦夫 (1992). 改訂セルフ・モニタリング尺度の検討 心理学研究, 63 (1), 47-50.
- 河崎智恵 (2000). 家庭科におけるキャリア教育モデルの開発 日本教科教育学会誌, 23 (1), 75-81.
- Lennox, R.D., & Wolfe, R.N. (1984). Revision of Self-Monitoring Scale. *Journal of Personality*

and Social Psychology, 46, 1349-1364.

- 成田恭代・松井豊 (2009). 自己呈示に伴う否定的意識の規定因の探索的検討 対人社会心理学研究, 9, 33-44.
- 小口孝司 (1995). サービス業従業者のパーソナリティ 日本労働研究機構調査報告研究所, 62, 158-173.
- Snyder, M. (1974). Self-Monitoring of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 30, 526-537.
- Snyder, M. & Nancy, C. (1980). Thinking about ourselves and others: Self-Monitoring and social knowledge. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39(2), 222-234.
- 須賀知美・庄司正実 (2007). 飲食店従業員の感情労働的行動とパーソナリティの関連—セルフ・モニタリングおよび自己意識との関連— 目白大学心理学研究 (3), 77-84.
- 杉浦京子 (2002). 臨床心理学講義 朱鷺書房
- 佐治守夫 (1996). カウンセリングを学ぶ 東京大学出版協会
- 辻平治郎 (2004). 自己意識と自己内省：その心配との関係 甲南女子大学研紀要, 40, 9-18.
- 八城薫 (2010). 大学生のセルフ・モニタリング傾向と友人選択および友人関係スタイルとの関係 大妻女子大学人間関係学部紀要, 12, 207-219.
- 山田竜平・斉藤勇 (2011). 現代の大学生における自己意識とセルフ・モニタリングの関連について 立正大学心理学研究年報 (2), 39-45.

まるやま はなこ (昭和女子大学大学院生活機構研究科)
たなか なおこ (昭和女子大学大学院生活機構研究科)